
名無しの男

樋口裕子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名無しの男

【Zコード】

N4717A

【作者名】

樋口裕子

【あらすじ】

平凡な主婦の頭の中に、ある日突然前世の自分が現れる。しだいに混乱していく記憶の中で主婦のとつた行動とは・・・

その朝男は日溜の中、朽ちかけたベンチに座り足にゲ・トルを巻いていた。

私はその男を知っていた。しかし、どうしても名前が思い出せないのだ。

いや、もともと名前なんて無かったのかもしれない。

名無しの男は、ただ黙々と灰色に変色したゲ・トルを巻いている。巻き終わつた足を下ろした瞬間、白い砂塵が舞い上がり陽の光にそれが反射した。

キラキラと輝く砂と光のイリュ・ジョンに、魅せられた男の手の動きが止まる。

その顔は少年のような驚きに満ちていた。

私だけが知っている。

名無しの男の肉体は、これから数時間後にバラバラに砕け散るのだ。

名無しの男は兵士だった。

彼はダイナマイトを抱いて、ジリジリと乾いた土の上を這つていた。

敵の巣に爆弾を仕掛けた逃げる。決してこれが初めてではなかった。

仕掛けてからどれくらいで爆発するかもわかっている。

しかしその時信じられないことが起きた。

走つても走つても土嚢に辿り着かない。

間に合わない！

恐ろしいほどに焦りが、真っ赤に焼けた鉄の杭になり心臓を貫いた。

やがて肉体と共に飛び散った意識が戻り、彼は真っ白な発光体の中に浮いていた。

そこは彼以外の固体が存在しない世界であり、何の音もない。

空間に横たわったまま名無しの男は、自分の死を悟った。

遠い昔、私は名無しの男だった。

最近、記憶が頻繁にシンクロするようになつた。

名無しの男の記憶は、

爆弾にふつ飛ばされて死んだときに消えてしまわなくてはならなかつた。

それが、消えるどころか急速に甦りつつある。

何故だ！名無しの男、何故お前が今ごろ現れる。

爆弾と心中した私を不憫に思つた神様が、

せつかく平和な時代と平凡な人生を与えてくださつたというのに。

私は少女から大人へと、それなりに美しい時代を駆け抜けで

平凡だけが取り柄のごく普通の男性と結婚した。

二人めの子供が生まれた年に父が逝き、翌年母が逝つた。

成人していく子供たち、老いていく私と夫。

人生は入れかわり立ちかわり月日と共に過ぎていく。

あきらかに、爆弾を抱えて這いずり回るより幸せな人生。

名無しの男が幸せな私の夢に暗い影を落とし始める。

名無しの男は遠い過去へと続く扉を開けた。

そこから先は轟音と、血と火薬と砂埃の臭いが立ち込めていく。

敵を狙え！

鋭い声に、土嚢の下横一列に伏せた兵士が一斉に銃を構える。

たちまち激しい銃撃戦が始まり自分の隣にいた男の動きが止まる。

左手で銃を持ちながらそいつの肩を揺すると、ズルリと身体が傾いた。

男の顔が無い。顔があつたあたりにはまだ赤黒い血の塊が溜まっているだけだ。

ライオンのような叫び声をあげて目が覚めた。

全身に汗をびっしりとかいでいる。

「」はぢはぢだ・・・

辺りを見回すと隣で夫が引きつたような顔をして私を見つめていた。

先生、妻の様子がおかしいんです。

精神科の病院を訪れた夫が医師の前で言ひにくそうに切り出した。

「」家族は何人ですか、子供さんは?」

医師はカルテに書き込み始める。

「子供はおりません。生まれてすぐ死んだんです。

しかし妻は子供が死んだとは思っていないんです。

それどころか妻の頭の中ではもう一人の子供が生まれていて、一人とも全寮制の学校に入っていて今は一緒にないとか・・・

「いくら言い聞かせてもダメなんです」

医師はペンを置き、相談者に向き直り話を聞く態勢に入った。子供が死んだという現実を20年も受け入れられないのも異常だが、それとは別に妻がだんだん別人になつていくような気がするのだと言つ。

普通に生活は出来るのだが、時々遠い田をしている。話しかけても反応がない。

まるで身体だけを残して心がどこかへ行つてしまつてゐるような。何か悩み事があるのかと聞いても、あら、どうして?と怪訝な顔をする。

そのくせ夢にまでうなされ、どんな悪夢かと思つぼぢ忘るしきり声をあげるところ。

食欲はどうですかと医師が聞くと、食欲はものすごくあると答えた。

もともとは食も細く、肉よりは野菜を好んで食べていたのに

最近は非常に肉食を好むようになつてゐたと不思議なつて聞か。

サンタクロースが白い服を着たよつて太つた医師は、笑みを浮かべ診断をくだした。

「いな子供をいのよつて思つてこらつしゃるとこいつとですが、それは子供を死なせたといつ皿の回責から生まれた幻覚でしょうな。

時々ぼつとなさつたり夢ひつなされるのもそれに関係しているかもしだせんが

奥さんは今45歳ですから更年期にはいつてこるとも考えられます。

食欲があるのはおおいに結構です。

まあ、さしあたつて薬とかの治療も必要ないと思われます。

田舎生活は普通にお出来にならるんですか。

それよつ出来るだけ一緒にいてあたつださー。

どうですか、今からでもお子さんを作られたひ

そんな・・・私らはもつ年ですか、と夫は笑いながら手を振つた。

「とんでもない、今は50歳でも出産なあこまよ。

まあ、それくらい前向きな考えが奥さんの救いになるところと
です。

現実が樂しけりや、空想なんて馬鹿らしく」と考えませんからね。
心のやせえになつてあげてください

「医師の言葉に夫はうなずき、帰り支度を始めながら一番氣になつ
ていることを言った。

「でもね、先生。私は妻が男に見えるときがあるんですよ」

「そんなこと心配ないですよ、私も時々自分の妻が男に見えます」

医師は大きく腹をゆらして笑つた。

「ありがとアゼコました。安心しました」

そう言って夫は帰つていった。

私は今高く生い茂つた草の間に身を潜め、敵の様子をうかがつて
いた。

息を殺し瞬きもせぬ目だけでそいつの姿を追いながら、

銃口をわずかに上げて撃つ態勢に入つた。

今だ！撃て！

耳の近くで声がする。私の指が銃爪を引く。

銃口から出た弾丸がスロ・モ・ショノの映像を見ているよつて元

真っ直ぐ一人の男の頭めがけて進んでゆく。

しかし地面に根をおろした木のように男は動かない。

やがて男の額に弾丸がめり込んで、頭蓋に穴を穿つ。

ゆづくじと倒れていく

男の額からほとばしじり出る 血、血、血

私の意識が遠のいてゆく。

家に帰った夫は、リビングの様子が変わっているのに驚いた。

部屋の真ん中にあつた応接4点セットが不自然な形をして右横の壁に寄せられている。

机を中心にして大小のソファ・がまるでシェルタ・のように積み重ねてあるのだ。

しかも机の下には妻が入つており、ソファ・の隙間から青白い顔を覗かせている。

「動くな！撃つぞ」

妻は、低い声で彼を威嚇した。

「マ・サ、マーサ、しつかりしてくれ。籌なんて握りしめて何をしているんだ」

ギョッとした夫は一瞬腰を引いたが、気を取り直しソファ - を動かして

妻を机の下から引つ張り出した。

本当に更年期のせいなのだろうかと彼は思った。

ひょつとして妻は脳の病気なのでは、と不安な思いがよぎる。

「お帰りなさい」

驚いたことにもひづ普段の妻に戻っている。

「ソファ - はこつたいたいぢりしたんだ」と彼は出来るだけやさしい声で聞いた。

「あら、お掃除していたのよソファ - を除けて床を掃いていたの」

「さつき僕を見て、撃つぞって言つたね」

「フフフ・・・「冗談よあなた。でもねえ、ほら」いつしてくるとまるで酔みたいだと思わない?」

妻は戦争¹²をしていたと言つた。

45歳の女がたつた一人で戦争」」」

やはり更年期なんだ、だからこんな子供じみたことをして

溜まつたストレスを発散させようとしているのだ。

夫は妻を不憫に思った。

夫が不信感を抱いている。それはとてもまずいことだ。

昔の記憶が残っている為、時々名無しの男になつて地獄のような戦場にトリップする。

このままでは精神病院に入れられてしまつかもしれない。

出て来るな！名無しの男、お前はもう死んだのだ。

どうすればもう名無しの男が出て来ないようになるか考えた。

あと一週間でクリスマスだ、休暇をもらつた子供たちが学校から帰つてくる。

ツリ・の飾り付けをしなくちゃならないし、プレゼントも買わないといけない。

とびきり美味しい七面鳥とミニスペイも焼かねばならない。

夫は子供たちと私にプレゼントをくれる。

名無しの男になつてゐる暇なんてない、私は忙しいのだ。

悩んだ末に私は決心した。

今度名無しの男になつた時、もつ一度死んでみよつ。

死ねばきっともう現れない。

あの爆弾でふつ飛ばされた瞬間を思い出すんだ。

その夜私はベットの中で一生懸命あの時の状況を思い出そうとした。

あの日、美しい砂と光りのイリュ・ジョンに心を奪られた。

私は爆弾を抱え、じりじりと乾いた地面を這つていた。

敵の巣が目前にある。

私は首もなく忍びより、首尾よく起爆スイッチをONにして離れた。

そして走る、走る、走る、案の定いくら走つても走つても田指す土嚢に着かない。

来る！そつ思つた瞬間私の身体は宙に浮いた。

いつの間にか発光体の中に浮かんでいる。

これでいいのだ、私は死んだ。

田覚めたらマ・サの自分がいる。

「気がついたみたいね」

私の耳元で女の声がした。

「いじはどいとかと聞こいつとしたら、いきなり耳がキンと鳴った。

「だめよ、まだ喋つねや。あなた一ヶ月も意識がもどらなかつたの
よ」

「一ヶ月も・・・と私は思った。たちまち私の頭の中で疑問が渦を巻
く。」

私は死なかつたのか、じゃああの別の人生はいつなんだった
のだろう。

私の夫は・・・子供たちは・・・胸が急に熱くなり涙が溢れ出了た。

看護婦はタオルで私の涙を拭きながら、私が瀕死の重傷だったと説
明しだした。

命は神様がくださつたものだからね、生きていらつてこいつとは、
生きなさいとこいつことなのよ。

あなたは国のために戦つて手足を失つたの、これからは・・・

ちょっと待つてくれ、手足を失つた？

私は手を動かしてみた。微かだが動いた感覚があった。

足の指を動かしてみた。足も動いた感覚があった。

「冗談だろ？、ちゃんと動くぞ」

私は怒りを込めて言つた。

「それは感じるだけなの、実際にはもう無いんだけど感覚を脳が覚えているのよ」

看護婦は手鏡を持ってきて私の身体を映して見せた。

包帯にぐるぐる巻きにされた芋虫のよつな胴体が転がっていた。

私は爆弾でふつ飛ばされて死んだのではなく、仮死状態になつていたのだ。

・・・嘘だろ？と私は思つた。

一度死んで女性に生まれ変わり、平凡で幸せな人生を送つたのではなかつたのか。

「もうすぐクリスマスなんだ、子供たちが帰つてくるんだ、夢だと言つてくれ！」

「しつかりして、今は四月よ。これは現実なの、あなた夢を見ていたのね」

看護婦の言葉が私を絶望の淵にたたき落とした。

授かつた命だ、頑張つて生きようと看護婦は言つけれど、

四肢を失いこれからどうやって生きていけばいいのだろう。

これは夢だ、思い出さなければ帰れなくなる。

私は泣きながら、夫のことを考え、子供たちのことを考えた。

子供たちの名前は・・・いや、子供は男?・・・女?・・・

何ひとつ思い出せなかつた・・・

「朝日が覚めたら隣で寝ていた妻が死んでいたんですね」

夫は両肩を落とし、駆けつけた刑事にそう話した。

「最近様子がおかしいので精神科の医師に相談に行つたんですね。

更年期だと言われましてね、心配いらないと・・・」

夫はショックで後の言葉が続かなかつた。

検察官が妻の身体を調べ、刑事に耳打ちした。

「一応不審死になりますので司法解剖させて頂きますが、よろしいですか」

夫は深くソファ - に腰を落としたまま黙つてうなづいた。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4717a/>

名無しの男

2011年1月21日14時27分発行